【体験版】
セキュリティ本部所属のアンドロイドはドスケベセクサロイドに改造される

目次

セキュリティアンドロイド・キュリー
誘拐の真相
セクサロイドに改造されるキュリー
デカ乳セクサロイドとなったキュリー

セキュリティアンドロイド・キュリー

時は二ＸＸＸ年。人類の科学技術は、飛躍的に発展した。現代では、高性能なＡＩを搭載したアンドロイドたちが活躍している。

アンドロイドたちは、社会のあらゆるところで働いている。飲食業やモデル業、農業や酪農業などなど……。アンドロイドたちは人間に代わり、多種多様な業界で働いている。

女性型アンドロイドのキュリーも、人間たちのために働いている。キュリーは、治安維持用のアンドロイドだ。主に、犯罪者たちを取り締まっている。

キュリーは、他の治安維持用アンドロイドたちと共に、とある事件について捜査してい

る。近頃、数名の人間やアンドロイドが、行方不明になっているのだ。

「行方不明になっているのは、人間の女性や女性型アンドロイドです。彼女たちは、何らかの犯罪に巻き込まれた可能性が高いです」

キュリーたちアンドロイドは、連携して捜査にあたる。行方不明者が最後に目撃された地域を、重点的に調べる……。

キュリーは仲間のアンドロイドと共に、街を捜査する。キュリーと行動を共にするのは、女性型アンドロイドのリティだ。

リティの長い黒髪が、月明かりに照らされて光輝く。キュリーやリティのボディは、ス

レンダーな女性の身体を模している。キュリーたちは、機能美を重要視したアンドロイドなのだ。

キュリーたちは、セキュリティ本部のアンドロイドたちと通信して、常に情報を共有することができる。キュリーとリティの両方に異常が発生しても、リカバリーは可能だ。

「こちらキュリー。これより、B地区の捜査を開始します」

「こちらはリティ。キュリーと共に、捜査を行います」

キュリーたちは、女性が行方をくらました地域へやってきた。街の中でも、B地区の治安は比較的悪い。仮に誘拐犯がいるとしたら、この地区に潜伏している可能性が高い。

キュリーとリティは、周囲を警戒しながら、捜査を行う。セキュリティ本部のアンドロ

イドとも通信して、B地区の状況を伝える。キュリーたちは万全を期して、行方不明者の捜索にあたる……。

キュリーたちがB地区の捜査を開始してから、約二時間が経過した。キュリーたちは、本部のアンドロイドたちと通信していた。だが、突然、通信が途切れてしまった。

「マズイです。リティ。本部との通信が、途切れてしまいました」

「どうやら、通信を妨害する電波が、発生しているようです」

「リティ。捜査を中断して、セキュリティ本部へ戻りましょう」

「そうですね、キュリー。この場に留まるのは、危険です」

キュリーたちは、捜査を中断して、セキュリティ本部へ帰還することに決める。だが、物陰から複数人の男が現れて、キュリーたちを取り囲む。

男たちは、対アンドロイド用のスタンガンを持っている。間違いない。彼らはキュリーたちへ、危害を加えるつもりだ。

「警告です！　我々は、セキュリティ本部所属のアンドロイドです！」

「我々を攻撃するのは、重犯罪に該当します！」

「構うことはない！　このアンドロイドたちを取り押さえろ！」

男たちが、キュリーとリティに飛びかかる。キュリーたちは男たちを拘束しようとするが、多勢に無勢だ。キュリーたちは抵抗も虚しく、スタンガンで無力化された。

男たちが、キュリーとリティをどこかへ運ぶ。おそらく、この男たちが誘拐犯なのだろう。

誘拐の真相

キュリーとリティは、工場のような建物へ運び込まれた。キュリーたちは、四肢のパーツを取り外されて、完全に動きを封じられた。セキュリティ本部との通信も、途絶えたままだ。

「マズイですね、リティ。これでは、どうしようもありません」

「そうですね、キュリー。とても悔しいです……」

キュリーたちがいる部屋に、一人の男が入ってきた。黒いスーツとサングラスを身に着けた、いかつい男だ。彼の姿や格好は、反社会的な人間にしか見えない。

「ククク。これはこれは、別嬪なアンドロイドが手に入ったな」

「私は、セキュリティ本部所属のアンドロイド、キュリーです。あなたは何者ですか？」

「俺の名はスドウ。表向きは、ジャンク品の回収やリサイクルをしている業者だ」

「では、アナタには裏の顔もあるのですね」

リティの言葉に、スドウがニヤリと笑みを浮かべる。リティの言う通り、スドウは裏の顔を持っているのだろう。

「その通り。俺たちは、人間やアンドロイドたちを、違法なセクサロイドに改造しているのさ」

「違法なセクサロイド……!?」

「では、女性たちが行方不明になっているのは……」

「そう。俺たちが誘拐したのさ。さらった女やアンドロイドは、セクサロイドに改造済みだ」

キュリーの想像以上に、スドウは危険な男だ。人間やアンドロイドを違法改造するなど、決して許されることではない。

キュリーはスドウへ、鋭い視線を向ける。だが、彼は全く気にしていないようだ。今のキュリーたちは、四肢を取り外されて、身動きが取れない。スドウにとって、今のキュリーたちは脅威ではないのだろう。

「世の中には、性処理用のアンドロイドもいます。なのに、人間や非性処理用のアンドロ

イドを、あえて改造しているのですか？」

「ああ。世の中には、お前らには想像できない『変態』もいるのさ。正規のアンドロイドでは、満足できないやつ。人間や非性処理用のアンドロイドを、無理やりセクサロイドに改造して興奮するやつ。そんなどうしようもない変態が、俺たちのお得意様なのさ」

キュリーはスドウの話を聞くが、理解が追いつかない。人間の中には、異様な性的嗜好を持つ者がいることを、知識としては知っている。だが、己の性欲を満たすために罪を犯すのは、理解に苦しむ。

「あなたは私たちも、セクサロイドに改造するつもりですね」

「ククク！　その通りだ。元セキュリティ本部所属のセクサロイド！　これは高く売れる

ぞ！」

「アナタという人は……！」

「さて、おしゃべりはここまでだ。おい！　この二体を連れていけ！」

スドウの部下と思われる男たちが、キュリーとリティを別室へ運び出す。彼らはキュリーとリティを、セクサロイドに改造するつもりだ。

セクサロイドに改造されるキュリー

キュリーとリティは、それぞれ別の部屋へ運び込まれる。キュリーは寝台の上に置かれて、頭部に複数のコードをつながれた。

キュリーは四肢のパーツを取られているので、逃げることはできない。もちろん、抵抗することもできない。

「クッ……。私が何もできずに、違法改造されるなんて……」

「へへへ！　諦めな！　お前をとびっきりエロいセクサロイドにしてやるからよ！」

一人の男が、手元の端末を操作する。すると、キュリーのボディに電撃が走る。キュリ

ーの視界が、チカチカと点滅する。

キュリーのプログラムが、エラーを発する。どうやら、プログラムを強制的に書き換えられているようだ。

「んギィ!?　おあっ!?　ぎ、ぐぎぎ……！」

「苦しいのは、最初だけだ。すぐに『良くなる』からな！」

「あがっ。た、たすけっ。ぴぎゅっ!?　あっ♡　あっ♡　あっ♡」

キュリーの意に反して、口から艶(あで)やかな声が漏れ出る。キュリーは無理やり、心地よい気分にさせられる。思考回路が、「快」で満ちていく。キュリーから正常な思考が、奪われてしまう。

「や、やだぁ♡　こんなの知らないっ♡　やめっ♡　止めてぇ♡」

「ハハハ！　すげぇエロい声だな！　お硬いセキュリティアンドロイドとは、とても思えないぜ！」

「ひぐぅ♡　こんなの、許されませんっ♡　許され、おっ♡　おおっ？　はへぇ……♡」

キュリーのプログラムが、グチャグチャに書き換えられる。何だか無性に気分が良くて、実に心地いい。これはマズイ。キュリーがキュリーではなくなっていく。

キュリーは、スドウたちのことを好ましく思ってしまう。彼らは悪しき犯罪者なのに、素晴らしい存在であるかのように錯覚してしまう。いや、スドウたちは素晴らしい人たちだ。キュリーのことを、「幸せ」にしてくれる。

「あへぇ♡　し、しゃあわせぇ♡　これが、『幸せ』なのぉ？　あっ♡　あっ♡　あっ♡」

「ほほーう！　セキュリティのアンドロイドが、すっかり『女』の顔になっちまったぜ！」

「女♡　私は女♡　メス♡　男様に犯されるメス♡　あひっ♡　えへっ♡」

キュリーのプログラムに、「メスとしての動作」が書き込まれる。キュリーは、男性とチンポの性処理をするセクサロイドなのだ。フェラチオ、パイズリ、そしてセックス。機械の女体を駆使して、男を悦ばせる必要がある。

いや、本当にそうなのだろうか。キュリーは、治安維持用のアンドロイドだったはずだ。キュリーはセキュリティに所属しており、犯罪者を取り締まって、治安を守る使命が

あったはずだ。

「わた、私は、セキュリティのアンドロイド♡　治安維持のために、んおっ!?　ぴっ♡　ぴいいぃ♡」

キュリーの脳裏に発生したノイズが、キレイさっぱり消去される。キュリーは、男に媚びてチンポを気持ちよくするために存在している。キュリーはセクサロイドだ。キュリーはセクサロイドだ。キュリーはセクサロイドだ。

「私はセクサロイド♡　私はセクサロイド♡　私はセクサロイド♡」

「そろそろ、プログラムの書き換えが完了するな。これでお前も、ドエロいセクサロイドだ！」

「はひっ♡　ありがとうございますっ♡　私はドスケベセクサロイドです♡　男様に、精一杯ご奉仕しましゅ♡」

キュリーのプログラムエラーは、無事に消え去った。これでキュリーは、「正常」となった。

キュリーは、本来の用途である性処理のために使われる。早く、男性の性処理がしたい。キュリーが壊れるまで、ハメ倒してほしい。

キュリーの頭部から、コードが外される。キュリーはセクサロイドに「戻れた」のだ。

「私は、キュリーは、性処理用のセクサロイドですぅ♡　男様のオチンポを、いっぱい気持ちよくします♡」

「ハハハ！　セキュリティのアンドロイドも、他愛ないな！　よし。コイツのボディを、セクサロイド用のデカ乳ボディに変えるぞ！」

「ハッ！」

キュリーは、男たちに持ち上げられて、部屋から運び出される。セクサロイドとして、男性の性処理をするのが待ち遠しい。

デカ乳セクサロイドとなったキュリー

キュリーのボディは、セクサロイド用のグラマラスなボディに交換してもらえた。キュリーは鏡に映る自身の姿を、ウットリしながら見つめる。

元のボディはスレンダーな身体つきで、胸やお尻が小さかった。だが、新しいボディは、豊満なおっぱいと大きなお尻をあわせ持つ。

キュリーのボディは、人工の偽物だ。だが、人間女性の柔らかくムチムチとした身体を、完全に再現している。この身体ならば、男性を欲情させるのは容易だろう。

「あはぁ……♡　私のボディ、えっろぉ……♡　素敵♡　んはぁ♡　早く、男様の性処理

がしたいわ♡」

「ほう。上出来だな。元がセキュリティのアンドロイドとは、とても思えないな」

「この声は、スドウ様♡」

キュリーが背後へ振り返ると、スドウが目の前に立っている。彼は笑みを浮かべながら、キュリーの身体を見つめる。スドウに見つめられると、キュリーの疑似オマンコが熱くなる。キュリーが人間女性だったら、オマンコから愛液を垂れ流していることだろう。

キュリーはスドウと出会い、セクサロイドになれた。今のキュリーにとって、彼は恩人と言っても過言ではない。

「はぁはぁ♡　スドウさまぁ♡　私は、とってもスケベなセクサロイドになれました♡

私に性処理させてくださぁい♡」

「お前とヤリたいのは山々だが、俺たちがお前を使うと、新品セクサロイドとして売れなくなる」

「そ、そんなぁ……」

キュリーはスドウの性処理ができないので、残念に思う。できることなら、最初の相手はスドウが良かった。だが、セクサロイドのキュリーに決定権はない。ここは我慢するのが、スドウのためになるのだ。

キュリーはオークションにかけられて、極めて高い金額で落札された。キュリーを落札

したのは、とある性風俗のオーナーである男性だ。違法な改造セクサロイドに手を出すあたり、彼の性風俗も非合法なものなのだろう。だが、今のキュリーにとって、そんなことはどうでもいい。

キュリーは、オーナーが経営する性風俗で働くことになる……。